

クリスマスを迎える喜び

皆さんは今年のクリスマスをどのように迎えますか？
幼稚園から初等部、中等部、高等部、大学の皆さんに、
2024年のクリスマスを迎えるいまの想いや喜び、
クリスマスの思い出を綴っていただきました。

幼稚園教諭 迫田 敏幸

新たにされて、今思う

様々なことに慎重であった自分が10年前に信仰告白をすることができたのは、教会や周囲の方との交わりを通して「まずは一步を踏み出してみよう」と思えるように、神様が私を変えてくださったからです。その後の10年を今振り返って思うのです。日々の悩み不安、選択決断、それらが訪れたときに、自分の周囲の人間を通して、頬を揺らす風を通して、道端に咲く花に注がれる光を通して、神様は自分にメッセージを語りかけてくださっている。「あなたは一人じゃない。大丈夫」そう思えるようになったことは、問題をすぐに解決することよりも遥に大きな恵みであると思うのです。

世界で様々な理由で悲しみや苦しみ、憎しみを覚えている方々を思う時、私たちのすぐ隣にも同じような思いで心がいっぱいになっている方がいるかもしれない。どうかその方々が、すぐ近くの人を通して、出来事を通して、ふと目をやった先に咲く一輪の花を通して、神様の愛が自分にも確かに注がれていることを感じることができるようにと祈りつつ、アドヴェントを迎えたいと思います。





幼稚園教諭 赤坂 洋子

賛美し待ち望む

毎年11月半ばを過ぎる頃から、幼稚園ではアドベントやクリスマスのさんびかや歌をたくさん歌います。その中から、毎年アドベントが近づくともまず歌い始める1曲をご紹介します。

『アドベントクランツに』 作詞／作曲 富岡正男

アドベントクランツにあかりがつくと
神の子 イエスさまの お誕生が近くなる
まことのひかり イエスさまのお誕生を
みんなが待っています みんなが待っています

(キリスト教保育連盟『幼児さんびかII』より)

アドベント礼拝ではアドベントクランツに点された灯りを見つめながら、このさんびかを歌います。毎週1本ずつ増えていく灯りと「イエスさまのお誕生をみんなが待っています」との賛美の歌声が合わさり、子どもたちの中の赤ちゃんイエスさまをお迎える期待や喜びも少しずつ高まっていきます。

国内外において自然災害や人間同士の争いが絶えない今、今年もまたアドベントを迎えられることに感謝し、子どもたちと賛美し祈りつつ、このときを過ごしたいと思います。

初等部教諭 飯澤 正実

闇夜を照らす光

「私を信じる者が、誰も闇の中にとどまることがないように、私は光として世に来た。」(ヨハネによる福音書12章46節)

ぼくは牧師の家庭に育ち、父が牧師をしていた時にはその教会に住んでいた。その教会の玄関近くには大きなイチヨウの木があった。地域伝道に燃えていた青年会の仲間たちと相談して、教会のイチヨウの木にクリスマスツリーをつけることになった。そのモデルになったのが、青山学院の美しいクリスマスツリーであった。木のでっぺんにつける星もツリーもすべて自分たちの作ることにしたが、素人の作業は試行錯誤を繰り返した。その間、多くの教会員が祈り支えてくださったことは感謝であった。何か月もかけて完成させたツリーの取り付け作業も自分たちで木に登っておこなった。

闇を抱える私たちのために、光として、命として、イエス・キリストは誕生された。

もう40年近くも前のことだが待降節になると、そのクリスマスツリーの光は輝き、救い主イエス・キリスト到来の喜びを世の人々に伝えている。





初等部3年 藤田 芽生

きみは愛されるために 生まれた

みなさんは「きみは愛されるために生まれた」というさんび歌を知っていますか。『初等部さんびか』2-49です。韓国で作られたさんび歌で、キリスト教徒だけでなく、韓国人みんなに愛されている曲です。韓国語では「タンシンヌンサランパッキウィヘテオナンサラン」あなたは愛を受けるために生まれた人という意味です。

私の両親は韓国で出会って、お母さんが具合がわるい時にはいつもお父さんが手をにぎってこの歌を歌ってあげるとなっていたそうです。私が生まれる時も、じんつうで苦しむお母さんに、お父さんがこの歌を歌ってあげたら私が生まれました。この歌はクリスマスのための歌ではないけれど、私たち家族はクリスマスに歌います。なぜかという、お母さんがはじめてお父さんの家族と韓国でクリスマス礼拝に行った時に、この歌を歌った思い出があるからだそうです。私たち家族にとって大切な曲なので、『初等部さんびか』で見つけた時はとてもうれしかったです。これからもクリスマスには家族でこの歌を歌って神さまにおいのりします。

中等部教諭 伊藤 秀行

ドイツのクリスマス

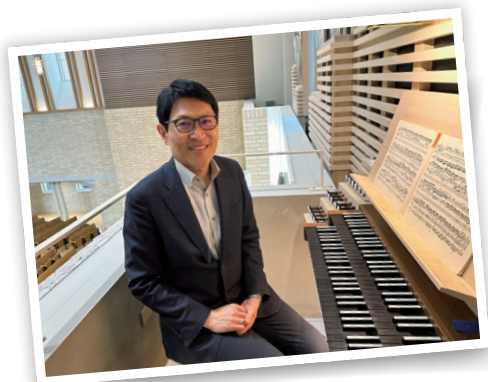


クリスマス4週間前、アドヴェント（待降節）の訪れとともに家庭や教会ではもみの木の葉やドライフラワーで作った克蘭ツと呼ばれる輪飾りに4本のローソクを立て、日曜日ごとに1本ずつ火を灯していきます。こうして、クリスマスは静かに幕を開けます。

各市町村の中心部には「クリスマスの市」が設営され、そこには、クリスマス関連のかわいい小物店や飲食店が素敵な装飾を施し並びます。人々はささやかな幸せを求めお店を回ります。凜としたドイツの冬に冷え切ってしまうそうですが、焼きソーセージや温かいワイン（グリューワインという）を味わいながら回っていると寒さも忘れてしまいます。

クリスマスイヴには、学校はもちろん会社や商業施設も2日半（イヴ24日は13時で閉店）のクリスマス休暇に入ります。日本のようにジングルベルにのってケーキを売る光景は見られず、人々は各家庭でプレゼントを持ち寄り、ツリーの傍らで手作りの料理とケーキを食べながら心豊かな時間を過ごします。

至福の時と言っても過言ではないほど、クリスマスシーズンはドイツ人にとって最も楽しみであり大切な時間の一つなのです。私が過ごした当時より移民や観光客が増え混みあっていると聞いていますが、伝統を重んじるお国柄ですから質素で静かなクリスマスは途絶えることなく継承されていくことでしょう。





中等部3年 木佐貫 謙

宿屋と僕

「どこのお部屋もいっぱいですよ、困った困ったどうしましょう♪」

これは、僕が幼稚園児だった頃のクリスマスページェントで宿屋が歌う歌の一部である。僕は初等部から青山学院に通っているが、幼稚園もキリスト教系だったので幼少期からキリスト教が身近なところにあり、数々のクリスマスページェントにも参加をしてきている。振り返れば幼稚園の頃に1回、教会学校で1回、初等部の英語の劇で1回と計3回も宿屋の役をやっていたことが思い出される。

ページェントで宿屋は、マリアとヨセフが宿を探している時に「空室はない」と言って追い返すシーンで登場する。これは、人口調査で人々がそれぞれの故郷に戻ったから発生した状況だが、ここではイエス・キリストが人々に受け入れられないということも表していると聖書の授業で習った。こうなると僕は宿屋役として3回、イエスを拒否し続けたということになるが、実際の自分はどうか。今すぐに全てを信じろと言われてたら難しいかもしれないが、時間をかけてイエスを自分の心の中に迎え入れられるようにしたい。

高等部教諭 池田 敏

忘れられないクリスマス

39年前、私は青年海外協力隊の隊員としてケニアで暮らしていました。ビクトリア湖のほとりに住み、その地の中学校で教えていました。大家さんから、クリスマスには一族が集まるので、部屋を明け渡して欲しいと言われました。仕方なくナイロビの協力隊員の寮で過ごしたのです。マラリアが発症したのは寮で、一人の時でした。クリスマス休暇を寮で過ごす者はほかにいません。クリスマス直前にたまたま寮に立ち寄ってくれた人が私に気付いてくれて、医療機関に連れて行ってくれました。特効薬の注射をしてもらい、その日のうちに元気になりました。

ケニアはキリスト教国。ナイロビにも素敵な教会がたくさんあります。元気になった私は、イブ礼拝をささげる教会を探しました。イブの夜、訪ねた教会は、石造りの荘厳な会堂で、たくさんの方が集まっていました。赤道直下のケニアの12月は冬ではありません。季節感の乏しいイブ礼拝。その祝祷の後、会堂に集まった人が皆で「Peace, from this place of peace…」と歌いながら

近くの人と握手をします。そこで出会った人に、翌日、お茶に呼ばれました。30年間宣教師をしているご夫妻で、クッキーをいただいてたくさんお話をしました。

世界のどこにいてもイエスさまの誕生を喜ぶ家族がいることを実感した出来事でした。





高等部3年 渡邊 裕貴

慈しみ

私の家では毎年、クリスマスを迎える前にひとつ、木製の小さな人形やオーナメントを買っています。木、天使、羊飼、博士、ヨセフ、マリア、そしてイエス様。毎年ひとつひとつ飾り付けるたび、新しい仲間をどこに置こうか、と家族で話しながら決めています。木の人形には顔がなく、シンプルな見た目とつりとした手触りは、どこかに温かさと優しさを感じさせてくれます。こういった素朴さと柔らかさの中に、神様が与えてくださった生命の喜びとその美しさが見つけられるように思います。

本来のイエス様の誕生日は12月ではないし、博士が来たのは誕生よりずっと後だという話を思い出しました。それでも、この日に世界の人々が改めて神様の愛と恵みについて考え、平和を祈ることに意味があるのではないのでしょうか。

とはいえ、今の世界は大変な状況に置かれています。痛みや苦しみの中にある人はクリスマスをどう捉えるのでしょうか。私たちは恵まれた環境にいるのに、祈ることしかできないという無力さを感じます。どうか、世界が穏やかな平和で包まれますように。

文学部准教授 DE LENCQUESAING, M.

クリスマスの思い出

8年前、日本で初めてのクリスマスを迎えました。

私は伝統を重んじる家庭で育ちました。毎年12月の上旬には、どこか神秘的で神聖な雰囲気が出てきます。しかし、フランスから10,000km離れたここ日本では、クリスマスの雰囲気は一切なし！ どうせなら雪国でクリスマスを過ごしたいと思い、北海道に旅行しました。

23日の夜に函館に到着すると、世界の色が変わっていました。どこもかしこも真っ白で、故郷のクリスマスを思い出しました。ただ残念に思ったのは、アメリカ人歌手の歌う甘ったるい曲がどこに行っても聞こえてきたこと。ここ日本では、クリスマスが恋人たちの催しになっているということを知らなかったのです。

カトリック教徒はミサの厳かな雰囲気を好みます。私に必要なだったのは、マライア・キャリーの歌でもフライドチキンの香りでもなく、聖歌やお香の香りでした。ところが、思ってもみなかった幸運が訪れました。泊まっていた小さなペンションのすぐ隣で、クリスマスのミサが行われたのです。この教会は床が暖められていて、入るときに靴を脱ぎます。フランスでも、天井の高い古い教会には床暖房が入っているところがありますが、靴を脱ぐことは御法度。足を温めるには、こっそり靴を脱ぐしかありませんでした。

ミサの後で母に電話をし、「クリスマスのミサに靴を脱いで参加したわ！」と伝えたところ、母は「何てこと！」と驚いていました。子供の頃の願いが日本でやっと叶った気分でした。



社会情報学部4年 林 優芽



希望の季節がやってきた！

私は4年生の前期をフィリピンのセブ島で過ごしました。

フィリピンでは9月から12月がクリスマスシーズンで「Ber Months」と呼ばれるイエス様の降誕を待ち望む時期であると学びました。実際に8月の終わりから街にはクリスマス商品が並び9月にはオーナメントが飾られ始め、至る所でクリスマスソングが流れます。街全体が希望に満ちた雰囲気に包まれていく様子を目の当たりにしました。

フィリピンは発展途上国で、多くの人々が貧困の中で暮らしており、一歩外に出ればホームレスやストリートチルドレンと出会います。しかし、彼らの顔には希望があり、街には笑い声が溢れています。

彼らとの生活を通して、イエス様の「希望の光」は誰もが待ち望み、受け取って良いものであることを感じました。そして、その優しく温かい愛は誰にでも漏れることなく注がれていることを身をもって体験しました。忙しなく時間が流れるこの日本でも、イエス様がこの地上に来てくださる大きな喜びに目を留めながら歩んでいきたいです。

